

プロテー・ウーシアー πρώτη οὐσία

アリストテレスにおける「第一の実有」について

伊藤 克巳

要旨

「そして実にまた昔から、そして今も、常に探求され、常に難問とされてきた、「あるもの」ὄνとは何か、それは「実有」οὐσίαとは何か、である…それゆえにわれわれもまたそのようにあるものについて、何であるかを、最も主として第一に、いわばひたすらに観究めるべきだ」

(*Met.* z1.1028b2-7)とする中心課題として、「実有」が、アリストテレスの哲学において極めて重要な位置を占めることは疑う余地のないところであろう。そして「実有」のうちでも取り分けて「第一の」と限定される「第一の実有」 πρώτη οὐσία が、その問いのさらに核心にあることも、間違いない。

ところが分量的に最も頻繁に「第一の実有」という用語を使用している、『カテゴリーアイ』の用例 (*Cat.* 5.2a11sq.) は、すべての用例を代表するものとはなっていない。内容的にはむしろ他の箇所ですべてのこととは観点の異なる、独特な叙述となっている点が否定できない。にもかかわらず、主に歴史的な経緯から、このいわゆる「個体」を示す用例が、アリストテレスの「第一の実有」（いわゆる「アリストテレスの第一実体」）についての代表的見解とされてきた。この点に関して最も重要だと思われる論点は、『カテゴリーアイ』での記述が、『形而上学』Λ巻、『形而上学』Ζ巻における、明白に「第一の哲学」についての記述と考えられる論述とは、直接のかかわりがないことである。すると、この歴史的に最も有名になってきた『カテゴリーアイ』での「第一の実有」の立ち位置をどのように理解すればよいのであろうか。また「第一の哲学」での文脈に即した、(本来の)「第一の実有」とは一体何なのであろうか。これらの問いに対して、答えを見出すことが、本稿の趣旨である。

そして本稿では、以上の問いに答えるための方法として、アリストテレス哲学の理解にとって、特にその「第一の哲学」の理解にとっての重要度に応じた順に、文献学的な成果も十分に踏まえた上で、正面から考察をすすめていくこととした。

すなわち、「第一の哲学」について全領域的に、総合的に論じている『形而上学』Λ巻の議論をまず検討し(第1章)、次に、しばしば『形而上学』の中心巻とされることが多いけれども、本稿の立場からは、「感覚的実有」の根拠の問題について論じている、と見なされる『形而上学』Ζ巻における議論について考究をすすめる(第2章)、以上の「第一の哲学」についての諸議論を踏まえた上で、古来、論じ続けられてきた『カテゴリーアイ』における「第一の実有」についての真相に挑む考察を行う、という探求の順序をたどることとした。これは結果的には、アリストテレス著作集 *Corpus Aristotericum* における、ページ表記の典拠となっているベッカー版のページ付けとは、逆の順序をたどる考察ともなる。なお、本稿では、これらの順番が、「執筆の順序を逆転させた構成」とは必

ずしも考えてはいない。本稿本文や注でもいろいろと考察したが、『形而上学』Λ巻はその主要部分が、最初期ではないにしても一定程度早い時期、『形而上学』Ζ巻は、Λ巻より遅い円熟期、そして『カテゴリーアイ』は、内容的な諸点も含めて考察すると、一般に言われているほど初期の作品ではなく、むしろΖ巻の時期とそれほど違わないか、あるいは少し後の執筆である可能性もあるのではないかと考えている。この問題点は『カテゴリーアイ』が初期の作品で、後の作品の『形而上学』とは時期が違うので、その思想に変化があった、とする通説のように単純には言えない、ということを示している。ここからは、むしろ扱っているテーマの違いの方が、重要な視点となることが示唆される。

本稿における諸考察から、全領域的に「実有」を問題とした際の「第一の実有」、すなわち「第一の哲学」の対象としての「第一の実有」については、単なる「実有」ではなく、「実有の実有」とは何か、ということが問題となっている、という視点について考慮することがまずは肝要である。さらには課題とする「すべての οὐσία」という表現が、プラトーンが『国家』(Resp.IV.486a8-9)において、哲学者は「全時間、全存在」を相手にする、と気宇壮大に表現した時の、「全存在」にあたる原語のギリシア語が、「すべての οὐσία」という表現であったことと酷似していることとの関連性を指摘しないわけにはいかない。アリストテレスはプラトーンの問題意識を、連綿と受け継いでいる。

そして何が「第一の実有」とされているか、という観点から、本稿の帰結をまとめると、以下のようになる。

まず、『形而上学』Λ巻(第1章で考察)における「動かされえない実有」の場合には、「ヌース」であり「実働態」 ἐνέργεια である「動かされえない始源」、「第一の動かされえずに動かすもの」(いわゆる「第一の不動の動者」)が、全領域的な意味での「第一の実有」とされている。

そして『形而上学』Ζ巻(第2章で考察)における「感覚的な実有」の根拠については、「内にあるエイダス」(いわゆる「内在形相」)としての「たましい」が、「第一の実有」とされている。

アリストテレスの「第一の実有」についての議論の本筋は、これらの『形而上学』Λ巻、Ζ巻における「第一の哲学」にかかわる議論のうちであり、そこでは「ヌース」や「たましい」が、極めて重要な課題として取り上げられていることが確認できる。

他方で歴史的に最も有名になってきた『カテゴリーアイ』第5章における「個体」としての「第一の実有」は、この意味での「実有の実有」ではなく、単に「実有」である。それゆえ「実有」を「全領域的に」考察した際の根拠として最も重要なのが「第一の実有」であり、これこそが「第一の哲学」の課題である、とするならば、少なくとも『カテゴリーアイ』で扱われている「個体」を、もしも「第一の実有」と表現するのであれば、「第一の哲学」の直接の課題とは何か別のテーマを扱ったものと言わざるをえないだろう。

この点について、「第一の実有」という言い方はしないが、『カテゴリーアイ』と同じく「個体」を重視している『動物の発生について』の議論では、「生成」の際の「個体」の「類」に対する優位性が指摘されていた。他方、『カテゴリーアイ』では、いわば「生成消滅する感覚的実有」とし

での「個体」が、生成してから消滅するまでの間に起こりうることがらに限定した議論がなされていた。両者とも「生成消滅しない動かされえない実有」についての議論ではない、という共通性を有している。「個体」を重視する視点とは、このような「実有」の領域性に基づいた視点であるとも言えよう。

この『カテゴリーアイ』での探求は、アリストテレスの学問分類の中での位置づけとしては、「第一の哲学」ではない、というだけではなく、「第二の哲学」とされている自然学のレベルの探求でもなく、「第一の哲学」や「第二の哲学」を含む、広い意味でのいわゆる「理論学」の中での探求でもない。さらにまたこの「理論学」に続く「実践学」の中にも入らず、さらにはまた「実践学」に続く「制作術」の中での探求でもない。本稿での考察によれば、『形而上学』Λ巻やΖ巻は、アリストテレスの哲学の内部では、「第一の哲学」について正面から論じた書物だが、『カテゴリーアイ』はそのような哲学的な議論をする際の前提となる、重要で基本的な基礎教養に関わる著作である、ということになる。これはテーマに応じた役割分担をしている、と理解できる状況だと思われる。

そして他方で、この「個体」としての「第一の実有」についての言及が、テーマとしては、いわばアリストテレスの解釈の範囲を超えて、きわめて豊かな哲学的な議論を、古来、現代にいたるまで喚起し続けて来ている、という点もまた忘れてはならない。本稿では哲学史的に重要な『カテゴリーアイ』を巡る種々の論点についても、「第一の実有」の解釈に関連する範囲で、総合的に検討した。

以上の本稿第1章から第3章における考察により、『カテゴリーアイ』という書物が、アリストテレスの解釈という枠組みを超えた地点でも考察せざるをえないような、大変に豊かな哲学的含意に満ちており、熟考に値する、ということ十分に認めるとしても、アリストテレスの本来の、*πρώτη οὐσία* 「第一の実有」の解釈としては、「第一の哲学」の探求対象としての全領域的な問題を正当に扱っている、『形而上学』Λ巻(本稿第1章参照)や、「感覚的実有」の根拠の問題を粘り強く扱っている、『形而上学』Ζ巻(本稿第2章参照)での議論を、「第一の実有」についての主要な見解とすべきである。そして『カテゴリーアイ』での「第一の実有」についての取り扱い(本稿第3章参照)については、アリストテレス哲学全体を射程に入れた全領域的な「第一の実有」についての議論に関する限り、無反省にその表現の代表的見解として扱うことは避けた方が良い。

そして本来の「第一の実有」とは、単に「実有」と記されているものの「根拠」、いわば「実有の実有」を示すための、特徴的な表現であった。そしてこの意味での「第一の実有」は、『形而上学』Λ巻における「全領域的なすべての実有の根拠」についての探求とその帰結としての「ヌース」の提示や、『形而上学』Ζ巻における「感覚的な実有の根拠」についての探求にかかわる議論と、その帰結としての「たましい」の提示によって、論じられていた、ということ、そして、『カテゴリーアイ』は、書物の性格上、様々な哲学的な議論をする際の前提となる、基礎教養に関わる著作であり、その文脈において、通常は「実有」とのみ呼ばれる「個体」が、とりわけ「第一の実有」と表現されていた、というのが本稿の帰結となる。